

小論文

<総括>

試験時間	120分	総解答字数	1500字
------	------	-------	-------

環境情報学部の小論文入試は24年度まで、その趣向と傾向が猫の目のように変化して、迷走を思わせるものであったが、25年度と26年度は環境情報学部の入試として基本に立ち返り、①情報の読解→処理→再現の能力と②問題発見→分析→解決策の提示というオペレーションの能力をそのまま試すための問題となっている。環境情報学部の小論文対策を続けてきた受験者にとっては解きやすい問題だったのではないかと。

さらに、抽象度の高い文章を課題文として多数提示し、各文章の趣旨を図解を用いて説明させ、また問題の定式化と構造分析に400字、解決策の提示に800字の小論文を課すといったように、本格的かつ典型的な小論文入試となっている。生成AIの登場によって、多数の資料の要約・分析から見解の陳述まで、すべてAIに丸投げすることができる時代に入っても、従来型の小論文入試で試されるような分析力・思考力・表現力を備えた人間であるかどうかを若い世代に問うという、環境情報学部の考え方が伝わってくる問題である。

<課題文の分析>

大問番号	
内容 (主題)	環境情報学部で求められる問題発見と解決策提言の能力
出典 (作者)	「環境情報学部が期待する学生——新しい時代の扉を開ける」(慶應義塾大環境情報学部長・一ノ瀬友博) 『「よりよい生存」ウェルビーイング学入門 場所・関係・時間がつくる生』(藤原成一) 『こころの処方箋』(河合隼雄) 『つながりの作法 同じでもなく違うでもなく』(綾屋紗月・熊谷晋一郎) 『情報生産者になる』(上野千鶴子) 『アジアのワンヘルス——人・動物・環境の健康をめぐるリスクとガバナンス——』(大塚健司 編著)
長短・難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・変化なし・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
設問	課題文	学部系統的	問1 (1)	説明	300字 (60字×5)	人間を含む生物とその環境や情報・相互作用について論じた5つの文章を読み、各文章が読者に伝えようとしているメッセージを簡潔に述べる。
			問1 (2)	その他 (図示)		5つの文章のうち3つを選び、それぞれの内容を一目で分かりやすく表す図を作成する。図は文章の理解を助けるための関係図や模式図のようなものを想定しており、各文章に登場する人間や生物、環境、情報という要素の相互作用を意識しながら作図する。
			問2 (1)	論述	400字	冒頭に提示された慶應義塾大環境情報学部長からの受験生に対するメッセージをふまえ、さらに問1で読んだ文章にふれながら問2について答える。まずは地球に生きる自身が特に重要と考えている問題を1つ選び、その「問題」の所在や本質を分析する。

			問2 (2)	論述	800字	問2(1)で分析した問題の解決策を考える。挑戦的かつ具体的な解決策を示す。また、環境情報学部で学んだ自身がその実現にどのように貢献するかも述べる。
--	--	--	-----------	----	------	---

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

<答案作成上のポイント・学習対策等>

<答案作成上のポイント>

問1について。(1)は深く考えずに早く済ませべきだろう。ただし「各文章が読者に伝えようとしているメッセージ」について説明しないとダメだから、各文章中でその主張の核心部分を取り出してきて簡潔に言語化することをめざす。(2)については、問2で触れるべき文章をA～Eの5つの文章から3つ選ぶという作業を行う関係上、先に問2の(1)でどんな社会問題を挙げるべきか、考えてから問1の(2)に取り組んだ方がよい。また、「図は文章の理解を助けるための関係図や模式図のようなものを想定しており」とあるので、まず文章を読んで頭に浮かんだヴィジュアルなイメージを明確化する。その上で因果関係や対応関係を⇨や⇩で表したり、集合論におけるベン図のような書き方で事象間の包含関係を表したり、アイコン的なものを用いて空間的布置を示したりする。字による説明はあくまで付随的なものとする。

問2について。(1)は昨年度も同様の出題がされており、環境情報学部の受験者なら、ここで指示されている「いま地球に生きるあなたが特に重要と考えている問題」を複数準備して、この入試問題において設問で指示されている事柄をすべてクリアできそうな問題を選んで書くことになる。準備しておくべき問題は、全世界が直面する問題ではなく、日本でとくに深刻な問題として意識されているものでもよい。ここで問題とは第一に、社会の持続可能性が危機に瀕しているということであり、さらにそれは①人口問題と②環境問題に分解できるだろう。また第二に、世界ではあらゆる意味でリスクが高まっており、不安定さが増している。経済にしても安全保障にしても、また政治的意思決定にしても、リスクが高い状況にある。このリスク（不確実性）を問題にすることができる。

問題は「少子化」「地球環境破壊」「安全保障上のリスクの高まり」といった一般的でそれゆえ漠然としたものではなく、より分析を深め、具体的に定式化する必要がある。漠然とした問題に対して(2)に示されるような「挑戦的かつ具体的な解決策」を提言することは難しいからだ。また、問題の核心には、①いくつかの追求すべき価値（環境保護と経済開発、安全性と成長、分配の平等と競争原理など）が相互にトレードオフの関係となり、両立しがたい、②人々のエゴイズムを優先し社会問題に直面しようとしないう傾向によって、思い切った解決策が採れない、③人々の間での情報の生産と流通に問題があり、社会的事実が共有されず、そのため社会的合意の形成が困難となる、といった事情が存在している。上記①②③のような事柄について、具体的に説明することで、問題の所在や本質を明らかにしていくことができる。

(2)で解決策を構想するわけだが、800字と大きな字数が与えられているが、設問で要求されていることが多いことに注意せよ。問1で読んだ文章への言及もしなければならないし、また環境情報学部長のメッセージもふまえておかなければならない。さらに「環境情報学部で学んだあなたが、その実現にどのように貢献するか」も述べておかなければならないのである。

解決策に関しては、(a)画期的な技術の導入による技術的解決と、(b)法制度の改革や新たな組織の立ち上げ、社会的資源の分配の仕方の転換（課税や規制等による）による政策的解決とがある。環境情報学部は文理の枠組みを超えた学際的研究を旨とする学部であるから、(a)(b)いずれで書いてもよいだろう。

なお、問1で扱った文章について「触れる」ことが求められている。「文章Xの言うように……」「……と文章Xは論じているが……」といったように明示的に言及しておくのが無難な方法だ。明示的な参照ではないが、各文章のキーワードを挙げて、ふまえている文章がどれか読者＝採点者に伝わるように書く方法もある。

<学習対策>

環境情報学部を志望する受験生は、大学で自分が学びたいこと、やってみたいこと、要するに「夢」を語ることはしても、それが現代の世界や日本の社会において求められているものなのかどうかについて考えない傾向がある。社会の中に切実なニーズがなければ、どんなにあなたがやりたいこと、あなたの夢であっても、それをあなたは職業にし、それで食べていける（＝お金を稼ぐことができる）ようにはならないのだ。ここでは発想の転換が必要であり、社会がどのような問題に直面し、その問題に関してどのような解決策を望んでいるかを考えなければならない。現代の世界と日本は大きな転換期に達しており、解決すべき問題には事欠かない。その際、解決すべき問題をリアルに感じられるようにするためには、自身の生きている地域社会に注目すべきである。地域社会の中でどのような人々が暮らし、どのような生き方をしているかを観察し、そこから問題を具体的に発見し理解していくことが重要である。

また、環境情報学部はその数多い研究会で、独自に問題をテーマとし、それを現代的な手法によって解決しようとして、活動を展開している。大学が公表している研究会の紹介や研究会自身が発信している活動をつねにモニターし、そこから多様な問題意識とアプローチの仕方に関する知識を身につけていく必要がある。

さらに、問題解決のための議論の構成の仕方を学ばなければならない。まず問題解決のために必要な問題の構造分析を行うために、上記の①②③のような仕方で見つめる目を養う。また解決策に関しては上記の (a) 技術的解決と (b) 政策的解決を提言するための手法と知識を身につけなくてはならない。

こうしたスキルを身につけるためには、付け焼刃の小論文対策ではまったく不可能である。受験時代の一年間を通じた体系的な小論文学習が必須であろう。